

ロッシーニのパリ時代と早期引退の真相

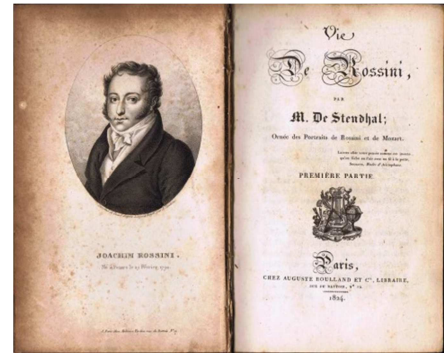
水谷 彰良

初出は2014年1～2月の藤原歌劇団公演《オリイ [オーイ] 伯爵》プログラムの拙稿「ロッシーニのパリ時代と早期引退の真相」(34～36頁)。書式を変更して図版を追加し、一部表記を改めてHPに掲載します。
(2014年10月)

ロッシーニが初めてパリに足を踏み入れたのは、1823年11月9日、ロンドンに向かう旅の途上だった。同月16日にはパリの名士たちが歓迎宴を催し、「音楽芸術に新時代を拓いた天才」に賛辞が贈られた。スタンダールが翌年予定した『ロッシーニ伝』をこの宴会に間に合うよう緊急出版したことで判るように、ロッシーニは31歳の若さで時代の寵児になっていたのである。

約1か月のパリ滞在が続いてロンドンを訪問したロッシーニに接触をはかったのがフランス大使ド・ポリニャックで、1824年2月27日、4万フランの報酬で1年間のパリ滞在とオペラ座 [王立音楽アカデミー] のためのオペラを作曲する契約が結ばれた。この話は同年9月16日のルイ18世の崩御で撤回されたが、11月25日、年2万フランの報酬で王立イタリア劇場の音楽舞台監督を務め、新作から別途報酬を受ける契約がフランス王家との間に結ばれた。

かくしてロッシーニはパリに定住し、シャルル10世の戴冠を祝う《ランスへの旅》を作曲したが、1826年10月に「王の作曲家にして声楽総視学官」に任命されるとオペラ座用のフランス語オペラを求められ、年1作のペースで《コリントスの包囲》《モイーズ [モイーズとファラオン]》《オーイ伯爵》《ギョーム・テル》を提供することになる。だが、1829年に37歳で初演した《ギョーム・テル》を最後にロッシーニはオペラの筆を折り、引退したとされる。いったい何が彼に起きたのか？



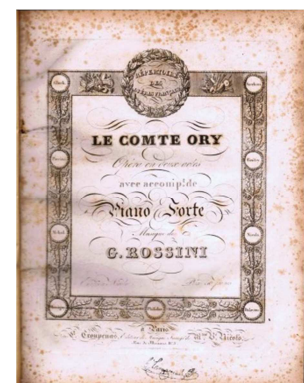
スタンダール『ロッシーニ伝』初版
(パリ1824[1823]年。筆者所蔵)

引退の計画とその撤回

ロッシーニの早すぎる引退は音楽史のミステリーとされ、「美食の楽しみを満喫するために引退した」、「ロマン主義の勃興に嫌気がさして筆を折った」などさまざまな説が流布してきた。しかし、どれも事実と反する。なぜならロッシーニは早くから引退の意思を持ち、その計画が二転三転する形で予想外の結末を迎えたからである。

ロッシーニが最初に引退をほのめかしたのは、27歳のときだった。噂を耳にしたスタンダールが1819年11月2日の友人宛の手紙に、「彼(ロッシーニ)は30歳で働くのをやめたがっている」と書いたのだ。8年後の1827年にはロッシーニ自身が父に、「あまりに疲れたので作曲をやめ、1830年に引退してイタリアで裕福な暮らしを楽しむつもりだ」と告げている(父ジュゼッペの手紙、7月24日付)。同年1月1日、フランス王家から約1万5千フランの報酬を3回払いで受け取る契約を結んだロッシーニは、1828年12月末の満期をもって引退するつもりだったのである。そして引退後の生活を考え、年3千フランの終身年金に関する交渉を王家との間に始めていた。

ロッシーニが新作の題材に《ギョーム・テル》を選んだのは1828年の春、台本の遅れもあり、年内の初演が難しいことから急遽作成したのが《オーイ伯爵》である(8月20日初演)。そしてこのオペラの著作権を購入した楽譜出版社トルブナに、「次の《ギョーム・テル》が最後のオペラになるだろう」と予告し、11月28日付の音楽新聞『ラ・ルヴュ・ミュージカル』にも「ロッシーニが《ギョーム・テル》で筆を折り、栄光を享受するためボローニャで隠居する考えを表明した」との記事が掲載されたのである。



《オーイ伯爵》初版楽譜
(パリ、1828年。筆者所蔵)

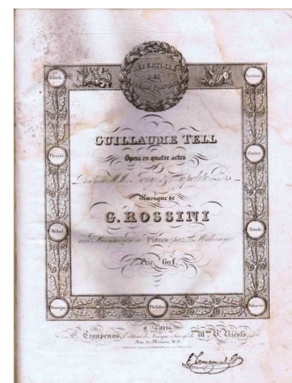
こうした流れに沿って引退したなら、ロッシーニは計画どおりにことを進めたことになる。だが、そうならなかった。彼はすぐに引退を撤回し、作曲中の《ギョーム・テル》を担保にフランス王家に対してオペラ座との長

期契約を求めたのである。その交渉は、最初の2幕の作曲を終えた1828年末に始まった。ロッシーニの要求は1829年から8年間に「3〜5幕の新作グラントペラを4作、1作当たり1万5千フランで作曲する」というもので、併せて年額6千フランの終身年金の支払いを開始するよう求めていた（1829年2月27日付でロッシーニが提出した契約案）。

この要求は4月4日にシャルル10世に上奏されたが、ロッシーニは返事を待たずに王家の代理人ロシュフコー子爵に書簡を送り、「英国、ドイツ、ロシア、イタリアから何度もより良い条件で求められたが断った」「私の音楽のキャリアは、その進歩の度合いからこれ以上先に進む必要はない」「（結論を延ばせば）あなたの望む春の《ギヨーム・テル》上演は不可能になる」と言って脅した（4月10日付）。それだけではない。彼は楽譜を回収し、《ギヨーム・テル》の稽古を中断させる実力行使に及んだのだ。これが功を奏したか、5月8日には「一定期間のイタリアへの帰国」と「王の作曲家にして声楽総視学官の肩書の継続」を含む要求を丸呑みする正式契約が結ばれ、作曲するオペラも「2年毎に少なくとも5作」に増えていた（この5作には、初演前の《ギヨーム・テル》が含まれていた）。

けれども疲労困憊で引退したがっていたロッシーニが、なぜ土壇場でこれを撤回したのか。理由の一つに、パリでオペラの著作権が高額で売却できたことが考えられる。著作権の確立されていないイタリアでは作曲料しか貰えないのに、法的に整備されたフランスでは《コリントスの包囲》の著作権を6千フランで売却でき、2年後の《オーリー伯爵》ではその価格が2万フランに高騰したのだ。これはパリのオペラ座にしか新作を書かないロッシーニの特例であるが、オペラの著作権が作曲料を上回る状況が《ギヨーム・テル》の制作中に生じたのである。これでは37歳のロッシーニが引退を撤回しても不思議はない。そして明るい未来を確信した彼は、8月3日に《ギヨーム・テル》を初演して成功を収め、イタリアに凱旋帰国したのだ。

だが、その期待は1年も満たずに裏切られる。パリで勃発した七月革命が、すべてをご破算にしてしまうのである。



《ギヨーム・テル》初版楽譜
(パリ、1829年。筆者所蔵)

運命を変えた七月革命

ボローニャに帰還したロッシーニがオペラ座の仕事に前向きだったことは、台本の到着を待っている、とロシュフコー子爵に書き送ったことでも判る（1830年5月4日付）。題材の候補に、ゲーテ『ファウスト』も検討していた。そこに降って湧いたのが、君主制を批判して蜂起したパリ市民が7月27〜29日の市街戦を経てシャルル10世を亡命と退位に追い込んだ七月革命だった。ブルジョアジーが牛耳る下院議会の指名で即位したオルレアン公ルイ・フィリップは、王室費を三分の一以下に縮減して旧王家の契約を無効とし、王家の所有物だったオペラ座を民営化させてしまった。その結果、ロッシーニの新作契約と終身年金も宙に浮いてしまったのである。政変を知ったロッシーニがパリに舞い戻ったのは9月12日。彼は父宛ての手紙に、「まったく静かです。パリで革命が起きたなんて信じられません」と書いて事態を楽観視したが、10月21日の手紙では、「年金が支払われず、将来についても判らなくなった」と嘆いている。

革命が1年足らずで頓挫する事態を何度も経験したロッシーニは、亡命したシャルル10世が復位すればすべて解決する、との淡い期待を抱いたに違いない。であればなおのこと、王（シャルル10世）の作曲家として旧王室との間に排他的な契約を結んだ彼はオペラ座以外の劇場に新作を書けず、それをすれば終身年金の前提が失われるディレンマに陥った。それゆえロッシーニは「オペラの筆を折った」と公言し、旧王室の官吏を相手に年金支払いの要求を3年間続けて埒が明かぬと、正式な裁判に訴えたのである。



新フランス王ルイ・フィリップ

最初の判決は1834年3月22日に下り、ロッシーニへの年金支給を命じたが、被告側は5月23日に控訴し、翌1835年2月14日に控訴棄却になるとこれを不服として最高裁に訴えた。同年12月にロッシーニの勝利で結審したときには、すでに6年の時が過ぎていた。

では無収入のロッシーニがなぜパリに留まり、訴訟を続けることができたのか。幸い彼には国王以上に裕福なパトロンが二人いた。その一人がスペイン政府の金融貸付けの全権を担う銀行家アレハンドロ・マリア・アグアド、もう一人がフランス国債と王家の投資を独占的に請け負う銀行家ジェイムズ・ド・ロッチルド[ロートシルト]である。ヨーロッパ経済を裏で操り、巨万の富を築いた彼らがロッシーニを崇拝して何ん不自由ない生活をさせ、

資産運用の面倒もみていたのだ。アグアドは 1831 年 2 月にロッシーニをスペイン旅行に招いて国王フェルディナンド 7 世に紹介、その翌年にはパリで流行するコレラを避けてロッシーニを半年間の南仏旅行に誘った。ロッシーニが食通の名声を得たのも、ロッチルド家との関係を深めて天才料理人アントナン・カレームと親しく交際したおかげだった。

引退ではなく、「優雅な生活」に転身したロッシーニ

パリの王立イタリア劇場は 1819 年から七月革命までの 11 年間に 1550 回オペラを上演したが、うち 988 回はロッシーニ作品だった。続く七月王政期も同様で、上流階級はイタリア劇場、新興ブルジョアジーはオペラ座、中産階級はオペラ・コミック座との棲み分けができていた。イタリア劇場の顧問を務めるロッシーニは卓越した歌手を斡旋し、ベッリーニ、ドニゼッティ、メルカダントをパリに呼んで新作を書かせるなど、フィクサーの役割を果たした。劇場とは別に新たな音楽の拠点に浮上した特権的サロンも同様で、一流歌手はロッシーニのマネージメントや伴奏でなければ出演を拒んだ。1835 年に作家エミール・デシャンが記したように、パリでは「午前中にベートーヴェンに失神し、夕方にロッシーニに失神する」状況が続いていたのだ。ロッシーニは作曲の筆を折ったと公言してみずからステイタスを高め、アグアドとロッチルドがヨーロッパ経済の黒幕として果たした役割を、音楽の世界で成そうとしたのである。

七月革命により、フランスの権力は国王からブルジョアジーと金融資本家に移った。芸術も王や宮廷に従属しない特権的エリート（誰もが天才と認める絶対的少数者）に支配権が移り、バルザックが 1830 年に予見した「優雅な生活」——精神的優越者たちが、金融、芸術、エスプリによって文化を支配し享受する世界——が始まっていた。これにいち早く気付いたロッシーニは、作曲家という職業や身分を捨て、「オペラと美食（これも特権的エリートのステイタスだった）を究めた天才」との名声を得て、音楽界に君臨する道を選んだのである。

裁判で獲得した終身年金 6 千フランは、金額的には 1831 年のオペラ座コンサートマスター兼指揮者やパリ音楽院教授の最高年俸の 2 倍に相当したが、人気歌手ジュディッタ・パスタはイタリア劇場で 6 晩歌うだけで同額の報酬を得られた。それでも大衆には羨望の的であり、年金を抱えて意気揚々とオペラ座を去るロッシーニの姿がカリカチュアに描かれている。だが、彼が年金なしに手にした「優雅な生活」は、常にそれを上回る見返りを彼にもたらしたことを忘れてはならない。その栄光は 1868 年の死まで続く。その意味でロッシーニは引退したのではなく、オペラ作曲家から不滅の名声を自己演出するアーティストに転身したと言っても過言ではない。



年金を抱えてオペラ座を去る
ロッシーニのカリカチュア